

## 特別支援学校(知的障害者)における就労支援に関する研究(5) —卒業生へのインタビュー調査から—

榑 慶太郎 [鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター研究協力員]

今林 俊一 [鹿児島大学教育学系(教育心理学)]

A study of employment support at special-needs school (for children with intellectual disabilities) (5):

Analyses of interviews with graduates

SAKAKI Keitaro and IMABAYASHI Shunichi

キーワード：特別支援学校、知的障害者、就労支援、卒業生、予後指導

### 1. 問題と目的

特別支援学校高等部を卒業した知的障害者の就職率は、全国平均で32.9%（文部科学省，2018）と上昇傾向にある。一方で，田中（2006）や福井・橋本（2015），村野（2016）によると，就労後の定着率の低さ（離職のリスク）が指摘されており，就労後の定着は課題の一つといえよう。また，障害者総合支援法に基づく障害福祉サービスとして，2018年4月から就労後の定着支援の取組に力が入られている。しかし，障害者総合支援法に基づく就労定着支援のサービスの対象者は，生活介護，自立訓練，就労移行支援，就労継続支援A型・B型を利用して一般就労した障害者であり，特別支援学校卒業後，すぐに一般就労した障害者については対象とはなっていない。これらのことから，特別支援学校の進路支援としては，一般就労したり，就労を継続したりするのに必要な力の育成とともに，卒業生の予後指導（アフターフォロー・アフターケア）における定着支援の要素も求められているといえる。また，独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構障害者職業センター（2014）は，3年以上職場定着する要因は，「適切なマッチングやフォローアップがある程度行われていること」や「企業側の配慮がある程度あること」，長期定着の要因としてはジョブコーチなどによる「集中的な支援や継続的なフォローアップ」等と報告しており，様々な支援の重要性を指摘している。

榑・今林（2019）は，特別支援学校の教師を対象としたアンケート調査の結果から，生徒の就労継続力を育成する指導・支援内容の観点から，大きく「生活習慣とコミュニケーション」「働くイメージ」「就労継続のための支援」「働くことへの理解と選択」の四つに分類している。

これらのことから，特別支援学校高等部を卒業した知的障害者が就労を継続するためには，生徒本人の力によるものと，障害者雇用を支援する側によるものに分けることができるといえる。

本研究では，一般就労した卒業生を対象とした調査を行い，卒業生の現在の状態を把握し分析することを通して，就労継続のための効果的な指導・支援の在り方を考察するために，今回は以下の

2点を明らかにする。一つ目は、就労直後の卒業生にとっての効果的な関係機関との連携の在り方を把握する。二つ目は、卒業生の予後指導（アフターフォロー・アフターケア）において情報を継続的に得るための効果的な聞き取り方法を検討する。

## 2. 方法

### 2.1. 調査の内容及び項目の選定

質問内容を作成するための事前調査（2019年6月実施）として、4名の卒業生に対して「今、仕事をするときに困っていることはないか（認知）」、「その困っていることについて、どう思っているか（評価）」、「その困っていることをどうしたいと思っているか（統制可能性）」、「困っていることについて相談している人はいるか（相談者の有無）」、「仕事をしているとき以外の時間の過ごし方（生活・余暇）」、「自分の仕事は、社会の中でどんな風に役に立っているか（貢献感）」、「仕事をする中で見えてきた夢や目標、希望はあるか（展望）」、「学校で教わっておきたかったことはないか」という質問をインタビューで行った。その結果、「特にない」や「分からない」といった回答が多く、具体的に考えて説明することの難しいことが推測されたことから、質問の内容をより具体的に行う必要があると判断し、改めて質問項目の作成を行うこととした。

特別支援学校の教師が卒業生への予後指導を行うときに卒業生に対して尋ねるのに適当な質問項目を、栗林・野崎・和田（2018）と原田・寺川（2017）の先行研究も参考にしながら作成した。質問内容としては、①仕事をするときに困ったことがあるかないかの認知について（「人間関係・コミュニケーション」「仕事の指示理解・対処能力」「仕事の内容」の三つの観点）、②相談者の有無について、③仕事をしているとき以外の時間の過ごし方について、④働くことでの貢献感について、⑤仕事をする中で見えてきた展望について、⑥学校で教わっておきたかったことについての六つの枠組みで質問を構成した。具体的な質問項目についてはTable 1に示す。インタビューで聞き取る際には、全ての質問に対して、「はい、いいえ、分からない」の3件法で回答してもらい、その回答に対する内容や背景等を具体的に確認することとした。

### 2.2. 調査対象

A県立B特別支援学校の管理職に事前に調査の承諾を得て、A県立B特別支援学校高等部を2019年3月に卒業し、一般就労した卒業生のうち、卒業生とその保護者及び進路先から調査への協力に了解を得られた3名（男性1名、女性2名）を対象とした。調査対象者3名は、一般的な日常生活において言語でのコミュニケーションをとることができる。

### 2.3. 調査時期

質問項目を作成した後、2019年7月下旬～8月上旬にインタビュー調査を実施した。調査対象者の全員が卒業直後の進路先での就労を継続しており、調査時点で就職後約4か月が経過している。この時期は、仕事内容や人間関係を含む職場の環境に慣れてくる時期である。また、シャインのキャリア発達理論（渡辺，2003）にもあるように、仕事が自分に合っているかを見極めたり、高等部在学中に思い描いていたイメージと実際の仕事内容や人間関係などの現実とのギャップによる不安

Table 1 インタビューでの質問項目

質問項目
<p>1 仕事をするときに困ったことがあるかないかの質問。※今までに困ったことはなかったか。【認知】</p> <p>○人間関係・コミュニケーションの面</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・あなたは、仕事のときに相手の意見をしっかりと聴くことができますか。</li> <li>・あなたは、仕事のときに自分の考えを正確に伝えることができますか。</li> <li>・あなたは、与えられた役割(仕事)を最後までやり遂げることができますか。</li> </ul> <p>○仕事の指示理解・対処能力の面</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・あなたは、仕事のときに指示されたことについて理解できていますか。</li> <li>・あなたは、仕事で分からないことや困ったことがあったとき、どのようにすれば良いかを考えていますか。</li> <li>・あなたは、仕事で分からないことや困ったことがあったとき、解決することができますか。</li> </ul> <p>○仕事の内容の面</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・あなたは、今の仕事内容は自分に合っていると感じていますか。</li> </ul>
<p>2 相談者の有無について【相談者の有無】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・あなたは、困ったことがあったとき、誰かに相談することができますか。</li> </ul>
<p>3 仕事をしているとき以外の時間の過ごし方について【余暇・生活】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・あなたは、連絡を取り合っている友達がありますか。</li> <li>・あなたは、習い事やスポーツなどをしていますか。</li> <li>・あなたは、休日に外出をしますか。</li> </ul>
<p>4 自分がしている仕事に対する社会の中での位置付け・価値付け【貢献感】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・あなたは、仕事で褒められることがありますか。</li> <li>・あなたは、自分が仕事で同僚からの期待を感じることがありますか。</li> <li>・あなたは、自分が仕事で役に立っていると感じることがありますか。</li> </ul>
<p>5 仕事をする中で見えてきた夢や目標、希望について【展望】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・仕事について、あなたは、何か新しいことにチャレンジしてみたいと思うことはあるか。※労働</li> <li>・あなたは、生活場所を変えてみたいと思うことはありますか。※生活</li> <li>・あなたは、お金の管理を自分でしてみたいと思うことはありますか。※生活</li> <li>・あなたは、毎日の生活のなかで、何か新しいことにチャレンジしてみたいと思うことはありますか。※生活</li> <li>・あなたは、休日の過ごし方について、何か新しいことにチャレンジしてみたいと思うことはあるか。※余暇</li> </ul>
<p>6 学校でもっと教わっておきたかったことについて【学習の意義】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・あなたは学校で、もっと一般的な常識やマナーについて教えてほしかったと思いますか。</li> <li>・あなたは学校で、もっと読み・書き・計算など国語や数学に関する知識を教えてほしかったと思いますか。</li> <li>・あなたは学校で、もっと人との関わり方について教えてほしかったと思いますか。</li> </ul>

感や喪失感など、いわゆるリアリティー・ショックを感じたりする時期でもある。

## 2.4. 調査方法と手続き

本研究では、調査対象者の障害の特性を考慮し、対面しながら面接者の質問の意図を正確に伝えることができ、また、不明瞭な回答については、さらに詳しく尋ねることができる調査的面接法(半構造化面接)を用いた。インタビューは、それぞれの被験者の勤務終了後に職場で行い、要した時間は被験者3名とも30分前後であった。手続きとして、研究の目的を説明した後、面接者と調査対象者との間でインタビューに先立って、三つの確認等を行った。

一つ目は、調査対象者からの申し出によって、いつでもインタビューを中止したり一部について回答を拒否したりすることは可能であることを伝えた。二つ目は、面接を録音することの許可を調査対象者から得た。三つめは、研究結果の公開について、プライバシーや権益の保護を最優先することを伝え、論文等にまとめて公開することへの調査対象者の承諾を得た。

## 3. 結果

### 3.1. 被験者ごとのインタビュー結果

インタビュー調査の結果について、被験者ごとに Table 2 から Table 4 のように六つの質問内容別

にまとめた。分析については、各質問内容の枠組みごとに被験者間を比較して行った。

### 3.2. 仕事をするとき困ったことがあるかないかの認知

仕事をするとき困ったことがあるかないかの認知については、〈人間関係・コミュニケーションの面〉、〈仕事の指示理解・対処能力の面〉、〈仕事内容の面〉に分けて結果を示す。

#### 〈人間関係・コミュニケーションの面〉

被験者3名とも相手の意見はしっかりと聞くことはできていて、与えられた仕事を最後までやり遂げることができていると認知しているが、自分の考えを伝えることについては、できている、できていない、そういう場面がないと回答が分かれている。

#### 〈仕事の指示理解・対処能力の面〉

指示されたことの理解については、被験者Cと被験者Eは分からないことは聞き返すことで理解できるようにしている。被験者Dは経験して慣れることで理解につながっていると回答している。また、「仕事で分からないことや困ったことがあったとき、どのようにすれば良いかを考えていますか」という質問については、被験者3名とも「できている」と回答している。具体的には、被験者

Table 2 被験者Cのインタビュー結果

<p><b>【仕事をするとき困ったことがあるかないかの認知】</b>          〈人間関係・コミュニケーションの面〉 相手の意見をしっかりと聞き、自分の考えを伝えることができている。周囲の人に伝えて、助けてもらったりしている。また、自分の仕事のノルマをこなすなど、与えられた仕事を最後までやり遂げることができている。          〈仕事の指示理解・対処能力の面〉 指示されたことの理解は、できたりできなかつたりだが、どのようにすれば良いかを考え解決することができている。困った時はすぐに周りの人に聞いたり相談したりして対処している。          〈仕事の内容の面〉 今の仕事は、楽しいと思えることから自分に合っていると感じている。</p>
<p><b>【相談者の有無】</b>          仕事は職場の人と母親、プライベートなことは母親に相談している。障害者就業・生活支援センターの担当者は相性が悪く相談しにくい。</p>
<p><b>【仕事をしているとき以外の時間の過ごし方】</b>          高等部時代の友達とメール等で連絡をとっている。内容は、「今日は暑かった」などの世間話。習い事は、小学部時代から習字をしている。これからも続けたい。休日は父親と近場のスーパーなどに出掛けている。</p>
<p><b>【働くことでの貢献感】</b>          工作中、器具類の交換や皿洗いをしたときに「ありがとう」と言われるなど褒められるなど、自分が仕事で役に立っていると感じているが、同僚からの期待は感じていない。</p>
<p><b>【仕事をすることで見えてきた展望】</b>          〈労働〉 仕事については、今のままで満足しており、何かチャレンジしてみたいと思うことはない。          〈生活〉 母親は、「一人暮らししてもいいんだよ」と言うけど、私はそうは思わない。一人暮らしとか考えたことはない。          お金の管理は、母に頼んでいる。一度母親と一緒にATMの使うためにチャレンジしてみたが、難しくてもういいと思った。          家族でご飯を食べに連れて行きたい。親に言ったら自分の分だけでいいよと言う。私は皆の分を払いたいのに。          〈余暇〉 家族旅行に連れて行きたい。親に言ったら、食事と同じように、自分の分だけでいいよと言う。私は皆の分を払いたい。</p>
<p><b>【学校で教わっておきたかったこと】</b>          一般的な常識やマナーについて、重要性を教えてほしかった。          数学はもう少しパーセントや何割を教えてほしかった。教えてはもらってはいるんだけど、今よく使うから思う。分からないときは親に教えてもらっている。          人との関わり方については、敬語とかもって教えてほしかった。たまに言葉遣いに不安がある。正しいか自信がない。身に付いていないと感じている。</p>

Table 3 被験者Dのインタビュー結果

<p><b>【仕事をするときに困ったことがあるかないかの認知】</b>                  &lt;人間関係・コミュニケーションの面&gt; 仕事のとときに相手の意見をしっかりと聴くことは、まあまあできている。忙しいときは半分しか聞けないときがあるが、しっかりと聞こうとは思っている。自分の考えは、言いたくても言いずらくて言えない。どう言ったらいいか分からないし、言うタイミングが分からない。空気を読むのが難しい。どんどん忙しくて時間が流れていくから、結局は最後に怒られる。与えられた仕事は、自分の休憩時間を削ってで、最後までやり遂げることができている。                  &lt;仕事の指示理解・対処能力の面&gt; 指示されたことについて、最初の頃は分からないことがあったが、慣れれば理解できるようになった。困った時には、周囲の人に聞くか、自分で前にやったことを思い出しながらしている。それでも、前とは若干変わって困ることもある。変更したことは伝えてほしい。困ったことは、可能な限り解決できている。誰でもいいから助けを求めるようにしている。                  &lt;仕事の内容の面&gt; 今の仕事は自分にあまり合っているとは思わない。実習のときはずっとその場において皿を取るだけだった。働いて初めて運ぶという経験をした。重たいものが多いから、(体力に不安がある自分には)本当に合っているのかなと思う。思っていたものと違う。辞めたいと思うときもある。怒られることもあるから。</p>
<p><b>【相談者の有無】</b>                  困ったことがあったとき、グループホームの人に相談している。職場の人にはしてはいるけど解決にならない。何も対処してくれない。お父さんには、グループホームに入っていて、離れているから、相談していない。友達には相談はしない。障害者就業・生活支援センターの人は最近来ないから相談しようがない。</p>
<p><b>【仕事をしているとき以外の時間の過ごし方】</b>                  高等部時代の友達とSNSで連絡を取っている。休日の外出はグループホームの職員や高校時代の友達、その保護者とする。気分転換しないと次の日の仕事がきつくなる。グループホームの利用者とはしない。一人で出かけるときは、バスで乗り換えの必要のないところに行く。</p>
<p><b>【働くことでの貢献感】</b>                  仕事で褒められたことはない。同僚から期待されていると感じたこともない。与えられた仕事は、できて当たり前って感じ。上司からもそれぐらい当たり前と言われる。仕事で役に立っているか分からない。じゃまという感じの扱いをされる。仕事が遅いと言われる。</p>
<p><b>【仕事をする中で見えてきた展望】</b>                  &lt;労働&gt; 仕事でチャレンジしてみたいことは、2階にパティシエさんがいる。そこでやってみたい。もともとパティシエになるのが夢だった。作っている人をたまに見るから、憧れる。                  &lt;生活&gt; 生活場所を変えたいとは、あまり思わない。グループホームは、気の合わない人がいても楽しい。                  お金の管理を自分でしてみたいと思う。今は、通帳の管理は保護者、カードはグループホームの職員の人。引き出し方を覚えると自分でお金が足りないときにすぐに引き出してしまいそうだが、いずれは自分で通帳などを持ちたい。                  &lt;余暇&gt; 余暇の過ごし方については、今のままで良い。旅行は、怖くてできない。今の状態で満足している。</p>
<p><b>【学校で教わっておきたかったこと】</b>                  もっと人との関わり方について教えてほしかったと思う。どう接すればいいかを教えてほしかった。どのタイミングで話しかけるのか。話しかけたときにこう話しかけられたら、こう返すとか。一般的な常識やマナー、読み・書き・計算など国語や数学に関する知識については、仕事で特に不自由を感じていない。</p>

Cは困ったときはすぐに周りの人に聞いている。被験者Dは周りの人に聞くか、自分で以前したことを思い出しながら行動しているが、解決が難しいときには、周りの人に調整を求める内容の回答をしている。被験者Eは、「一日の中で、仕事の流れを考えながら、できることをするようにしている」と自分の中で調整することを考えている。「仕事で分からないことや困ったことがあったとき、解決することができていますか」については、被験者3名ともできていると認知し、解決方法とし

Table 4 被験者Eのインタビュー結果

<p><b>【仕事をするときに困ったことがあるかないかの認知】</b>          &lt;人間関係・コミュニケーションの面&gt; 相手の意見をしっかりと聴くことはできている。自分の考えを伝える場面(必要性)がない。与えられた仕事を最後までやり遂げることはできている。          &lt;仕事の指示理解・対処能力の面&gt; 指示されたことについて理解はほとんどできている。たまに分からないことはあるが、聞き返している。分からないことや困ったことがあったら、一日の中で、仕事の流れを考えながら、できることをするようにしている。上司に電話したり、近くの同僚に聞いたりして解決している。          &lt;仕事の内容の面&gt; 今の仕事内容は自分に合っている。自分には清掃しかないから。高等部時代にいろいろと実習して清掃しかないと思った。今のところ清掃の仕事が一番合っている。他の仕事をしてみたいと、今は思わない。</p>
<p><b>【相談者の有無】</b>          仕事の相談は、上司や一緒に働いている同僚にしている。仕事以外はあまり困ることはないが、困ったら親にする。障害者就業・生活支援センターの人は会う機会がない。</p>
<p><b>【仕事をしているとき以外の時間の過ごし方】</b>          最近では誰とも連絡は取り合っていない。以前は高等部のときの友達とSNSで取っていたが、自分から連絡をすることはしない。話す内容がない。休日の外出は、最近はお父さんとばあちゃんの家に行ったり、庭の手入れをしたりしている。遊びで外出はしない。友達と休みの日が合わない。</p>
<p><b>【働くことでの貢献感】</b>          仕事で褒められることはある。いつもの仕事やたまにしかできないことをしたときに同僚から「ありがとう」と言われた。          同僚からの期待も感じる。違う部署の人から「期待の星」と言われたことがある。他は、ボランティアの人から「頑張ってるね」と言われたことがある。          自分が仕事で役に立っていると感じる。理由は、頑張っているから。トイレを掃除していたら利用した人から「ありがとう」と言われた。</p>
<p><b>【仕事をする中で見えてきた展望】</b>          &lt;労働&gt; 仕事でチャレンジしてみたいことはない。仕事内容は、一緒に働いている人と全く同じ。          &lt;生活&gt; 一人暮らしをしてみたいという希望はないわけではないが、今はいい。強い希望ではない。          お金の管理を自分でしてみたいと思う。今は、通帳は親が管理していて、引き出すときは親と一緒にいる。親が、お金の管理をさせると言っていたので、することになると思う。          運転免許があるから、通勤など自分で車を運転して移動してみたいと思わないかという質問に対しては、職場では、運転をしているし、運転自体はチャレンジではない。当たり前のこと。近日常に車を購入して自分で通勤することになっている。          &lt;余暇&gt; 欲を言えば、バイクの免許を取って、バイクを買いたい。</p>
<p><b>【学校で教わっておきたかったこと】</b>          自分にとっては、特に不自由はないが、言葉遣いはもっと厳しくしてもらった方が良かったと思う。人との関わり方についても思う。自分は人見知りがあるので、T先生の御蔭で良くなった。</p>

では職場の人に相談すると回答しているが、被験者Cと被験者Dは、周りの人という複数の人を挙げているのに対し、被験者Eは上司という特定の人を回答している。

#### <仕事の内容の面>

被験者Cは楽しいと思えていること、被験者Eは高等部時代の産業現場等における実習の経験や他の仕事をしてみたいと思わないことから、今の仕事内容が自分に合っていると感じている。被験者Dは、高等部時代の今の職場での実習経験との仕事内容の違いからギャップを感じており、辞めたいと思うときもあることから、あまり合っているとは思わないと感じている。

### 3.3. 相談者の有無

相談者の有無については、被験者3名ともいるという結果であった。仕事についての相談は、被験者Cと被験者Eは職場の人に相談しているのに対し、被験者Dは生活の場であるグループホームの職員に相談している。また3名とも障害者就業・生活支援センターの担当者には相談する機会を活用できていない。

### 3.4. 仕事をしているとき以外の時間の過ごし方

仕事をしているとき以外の時間の過ごし方については、被験者3名ともそれぞれ異なる過ごし方が見られた。被験者Cと被験者Dは、高等部時代の友達とSNSで連絡を取り合っている。習い事をしているのは被験者Dだけであった。休日に外出する相手は、被験者Cと被験者Eは父親であり、被験者Dは高等部時代の友達やグループホームの職員である。

### 3.5. 働くことでの貢献感

働くことでの貢献感については、「あなたは、仕事で褒められたことがありますか」という質問については、被験者Cと被験者Eは「ありがとう」と言われた経験からあると認知している。「あなたは、自分が仕事で同僚からの期待を感じるがありますか」については、被験者Cは「『はい』とは言い難い。感じる事が難しい。」と回答し、被験者Dは「いいえ」、被験者Eは違う部署の人や職場に来ているボランティアの人からの言葉掛けから期待を感じていると回答している。「あなたは、自分が仕事で役に立っていると感じるがありますか」については、被験者Cと被験者Eは「ありがとう」と言われた言葉から役に立っていると感じている。

### 3.6. 仕事をする事で見えてきた展望

仕事をする事で見えてきた展望については、仕事面では被験者Dだけが新しいことにチャレンジしたいことがあると回答し、パティシエをしてみたいという希望をもっている。生活面では被験者Dと被験者Eがお金の管理を自分でしてみたいと考えている。被験者Cは家族にご飯を御馳走したり、旅行に連れて行ったりしたいという希望をもっている。余暇面では、被験者Eはバイクの免許を取ってバイクを買いたいという希望をもっている。

### 3.7. 学校で教わっておきたかったこと

学校で教わっておきたかったことについては、一般的な常識やマナーは被験者Cと被験者E、読み・書き・計算などの国語や数学に関する知識は被験者C、人との関わり方については被験者3名とも学校でもっと教えてほしかったと思っている。

## 4. 考察

仕事をするときに困ったことがあるかないかの認知については、仕事で分からないことや困ったことがあったとき、被験者3名とも解決策の一つとして、周囲の人に相談するようにしている。学校教育の中でも困ったことがあったら相談するように指導していることが多く、その成果が表れているといえる。しかし、被験者Cと被験者Dの相談する相手については、「周りの人」や「誰でもいいから助けを求める」と回答していることから特定の人ではない。一方、被験者Eは「上司」とい

う特定の相談相手を挙げている。被験者Cと被験者Dは相談内容に関わらず、とにかく周りの人に聞いているのに対し、被験者Eは相談内容に相応しい人を考慮して相手を選んだり、相談する相手の優先順位を考えたりしているといえる。これらの事例から学校では、困った時の対処法として相談することを指導するだけでなく、置かれた状況判断の可能な生徒にはその場では誰に相談するかという一歩踏み込んだ指導内容も必要であろう。また、被験者Dは最終的には周囲の人に自分が困らないよう行動してもらいたいという周囲に調整を求めている。一方、被験者Eは経験を生かして自分でできることをするようにしており、自分の行動を調整するようにしている。

今の仕事内容は自分に合っていると感じているかについて、被験者Cは、仕事が楽しいと思えていることから合っていると感じ、被験者Eは高等部時代の実習の経験から清掃が合っていると感じている。一方、被験者Dは、合っているとは思っておらず、辞めたいと思うときもあると回答している。このことから、就労を継続するための要素の一つとして、仕事内容が合っていると感ずることが必要であるといえよう。特に、被験者Eは、高等部在学中に特別支援学校技能検定（清掃部門）にチャレンジして好成績を残すなど、高等部時代に周囲から認められた経験が自己効力感につながっていたと思われる。このことから、在学中に検定等で級位を取得し、その技術を就職に生かすことが有効な事例であったといえよう。一方で被験者Dは、進路選択をするときに、実習で経験した仕事内容に納得して進路先を決定していた。しかし、実際に就職してみて仕事内容が納得していたものとの違いに直面することとなり、仕事内容が合っていないと判断している。すなわち、実際に働きながら、今の仕事が自分に適しているかを見極めたり、継続するか考えたりする状況に置かれているといえる。このことから被験者Dは、シャインの発達ステージで捉えられる仕事世界参入段階での課題に直面し、いわゆるリアリティー・ショックを感じているといえよう。一般的に年度初めに計画されている産業現場等における実習では1回の実習が2週間程度のケースが多く、また高等部3年生が就職先を決定するために行う特別実習の期間は2週間よりも短いことも多い。実習では、就職した後に任される可能性の全ての仕事内容を体験することは難しいのが現状である。実習のときに任された自分の仕事の流れの前後の作業を知ることが、実際に就職したときに就職前と就職後のイメージのズレを小さくすることにつながるであろう。そこで、実習後の振り返りや反省を行うときに、仕事全体をイメージした省察を行うことが必要であろう。

相談者の有無についての回答で、被験者3名とも障害者就業・生活支援センターの担当者に相談することがまだできていない。被験者Dと被験者Eは会う機会がないと述べるなど、障害者就業・生活支援センターの担当者に会う機会づくりについて、受け身的な発言をしている。関係機関を活用する際には、必要があれば積極的に連絡を取ることや連絡する手段についてもっと在学中に指導しておく必要がある。

仕事をしているとき以外の時間の過ごし方では、被験者3名とも高等部時代と大きく変わってはならず、連絡を取り合う人や外出をする相手など高等部時代の人間関係が基盤になっているようである。このことから、学校から社会に出た直後では、余暇の内容や人間関係が急激に変化するものではないといえる。そこで、人間関係の課題に直面したときには、被験者Dのように休日に外出す

るなどの気分転換をすることが仕事を続けることに一役を担っているとすれば、高等部在籍時から就労後における生活全般を見通した検討の必要があろう。

働くことでの貢献感については、「ありがとう」などの感謝の言葉を受け取ることが、役に立っている、貢献しているという実感につながっている。感謝の言葉を受け取る相手は、被験者Cは同僚であるのに対し、被験者Eは違う部署の人やお客さんなど多岐に渡っている。これらのことから、学校や支援する関係機関は、進路先には毎日の業務の取り組みについて「ありがとう」などの言葉掛けで承認欲求が満たされ働く意欲につながることを伝える必要があろう。

仕事をすることで見えてきた展望については、仕事に合っていないと感じている被験者Dだけが、仕事でチャレンジしてみたいことがあると述べているが、被験者3名とも、就労・生活・余暇の面では、あまり変化を求めている結果であった。これは、現段階の状況に満足しているからと推察される。これらの結果から、夢や希望をもつことは大事であるとされるが、就職して4か月という段階では就労先に適応することが優先事項であり、今後の展開を見守ることも必要であろう。

学校で教わっておきたかったことについては、現在必要に迫られているかどうかで回答が分かれている。これらのことから、在学中に教える内容は、スキルだけでなく、なぜその学習をする必要があるのかという意味や価値をもっと取り上げて指導する必要があろう。

本研究の卒業生3名の事例からいえることは以下のようにまとめられる。効果的な関係機関との連携の在り方として考えられる内容は、まず、被験者3名とも障害者就業・生活支援センターの利用について受け身的であったことから在学中に適切な利用方法を学習させることである。さらに、障害者就業・生活支援センターの支援員が卒業生に対して定期的に面会や契約の相談をするとき以外いつでも利用できることを声掛けしてもらうように学校として依頼することができよう。就労先の支援体制については、原田・寺川(2017)の指摘するように、「必要とされる自分」を感じながら意欲的に働き続けるためにも、分かりやすい言葉で「あなたが必要である」というメッセージを伝え続けることが重要であろう。カリキュラム改善に取り入れることが考えられる内容は、相談内容に応じて適切な相談相手を判断する力を育成すること、在学中の各種検定等の取得の取組を進める中で自己効力感を高め進路選択に生かすこと、実習後の振り返りや反省を行うときに仕事全体をイメージした省察を行うこと、障害者の就労を支援してくれる関係機関の利用方法を学習すること、学習内容の意味や価値を生徒が考えられるようにすることなどである。また、卒業してしばらくの間は、活動の場が学校から就労先へと変化しても、生活スタイルや人間関係は急速に広がっていくものではないといえよう。

最後に、卒業生への予後指導のときに卒業生に対して「困ったことはないか」と漠然と聞くことよりも、本研究における質問項目のように具体的に尋ねることで困っている原因や背景等まで把握することが可能となり、関係機関との連携の際に有益な資料を提供することとなる。

## 引用文献

- 独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構障害者職業センター (2014). 精神障害者の職場定着及び支援の状況に関する研究 (調査研究報告書№117) サマリー
- 福井信佳・橋本卓也 (2015). 知的障がい者の離職要因に関する研究 日本職業・災害医学会会誌, 63, 310-315. <http://www.jsomt.jp/journal/pdf/063050310.pdf> (2017.04.08)
- 原田徳恵・寺川志奈子 (2017). 知的障害のある青年の働く意欲を支える特別支援学校高等部教育のあり方: 卒業生へのインタビュー調査から 地域学論集: 鳥取大学地域学部紀要, 13(3), 61-81. <http://repository.lib.tottori-u.ac.jp/5452> (2018.09.25)
- 栗林睦美・野崎美保・和田充紀 (2018). 特別支援学校卒業後における知的障害者の就労・生活・余暇に関する現状と課題: 保護者を対象とした質問紙調査から 富山大学人間発達科学部紀要, 12(2), 135-149. <http://doi.org/10.15099/00018343> (2018.09.20)
- 文部科学省 (2018). 特別支援教育資料 (平成29年度)  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/material/1406456.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1406456.htm) (2018.08.07)
- 村野一臣 (2016). これからの進路支援に求められるもの 特別支援教育研究, 707, 2-6.
- 榊慶太郎・今林俊一 (2019). 特別支援学校 (知的障害者) における就労支援に関する研究(4): 就労継続力の観点から 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 28, 151-160.
- 田中敦士 (2006). 発達障害のある人への就労・就業支援 本郷一夫・長崎勤 (編) 別冊発達28 特別支援教育における臨床発達心理学的アプローチ (pp. 231-240) ミネルヴァ書房
- 渡辺三枝子 (編) (2003). キャリアの心理学 ナカニシヤ出版

## 付記

本調査の実施にあたり、A県立B特別支援学校高等部の卒業生の皆様方に御協力をいただきました。ここに記して深く感謝の意を表します。